

第 29 回 (2017 年度) 小泉文夫音楽賞受賞記念講演

◆無断引用転載禁止◆

「この目的のために私はあらゆる歴史的瞬間の歴史についてデータを集めたい」：グローバル化の向こうにあるグローバル音楽学

フィリップ・V・ボールマン

(シカゴ大学音楽科およびカレッジ、ルートウィヒ・ローゼンバーガー ユダヤ史殊勲教授。

ハノーファー音楽演劇大学客員教授)

通訳：植村幸生 翻訳整理：佐藤文香

東京 2018 年 5 月 24 日

音楽上の出会いと歴史的な瞬間

ちょうど 249 年前、1769 年 5 月に、25 歳の神学者、人類学者、哲学者、音楽学者であったヨハン・ゴットフリート・ヘルダー (1744~1803 年) は、故郷ラトヴィアのリガを遠く離れる船旅に出た。さまざまな人生経験を経てドイツに至り、そこで彼は世界の音楽とは何なのか、何であり得るのかについての理解を変容させる思想を生み出した。ヘルダーはその船旅で詳細なフィールドノートとも言える日誌をつけているが、そこで彼は個人的な出会いが共通の人間性のグローバルな経験へと変容していく様子を丹念にたどっている (Herder 1997 を参照)。生前上梓されることのなかったその日誌のなかで、彼はグローバルな人類共同体に負う研究者として取り組む課題を明らかにしている。

この目的のために私はあらゆる歴史的瞬間の歴史についてデータを集めたい。どの瞬間も特有の用途、機能、習慣、負担、そして喜びの様相をまざまざと伝えてくれる。従って、それらのデータをじゅうぶん生かすために、私はできるかぎり、今日に至るすべてのものを集めたい (Herder and Bohlman 2017、266 頁に引用)。

ヘルダーのグローバルな出会いの瞬間は、すばやくかつ全面的に、その影響を音楽に残した。というのは彼が集めたデータのなかには世界中の民族の歌があったからである。四年後の 1773 年に、彼はこれらの歌を表す新語を造り出した。すなわち「民謡 Volkslieder」である。彼はこうした歌を集めながら、1774 年には採集した歌の出版に着手し、ついには 194 曲を収めたアンソロジーを 1778 年と 1779 年に二巻で刊行した。この著作は単に『民謡集 Volkslieder』と呼ばれた。ヘルダーの「民謡」の影響はじっさい甚大であり、グローバルな規模での音楽思想におけるパラダイムシフトであった。その影響はグローバル音楽史の流れを変えつづけた。

民謡やその他のジャンルの音楽に関するヘルダーの著作は、私がこの小泉賞記念講演を通じて「グローバルな音楽学的瞬間 global musicological moment」と呼ぶものを表している。私は二つの次元をもつそのグローバルな瞬間の一時的性についてお話したい。第一に、音楽上の客体（たとえば歌）が主観性（歌が世界中で人間社会をどのように作りあげるか）へと変容するゆえに、革命的な規模での変化が起きる、そうした瞬間それ自体というものがある。第二に、グローバルな音楽学的瞬間は、過去において理解され、未来において展開するので、歴史を変えていく。

ヘルダーのグローバルな音楽学的瞬間がとりわけ重要であるのは、それが世界音楽 world music の概念が創出された瞬間を表すからである。彼の著作はエストニアの歌に始まり、マダガスカルとペルーの歌に終わっている。または聖書の歌（雅歌 The Song of Songs）や中世イベリアの叙事詩（エルシド）について重要な著作を書いた。にもかかわらず、ヘルダーのグローバルな音楽学的瞬間は民族音楽学の歴史から孤立してはいない。[その瞬間に]先立つ人もいれば、後に続く人もいたのだが、この東京講演における私のより大きい関心は、まさにこの民族音楽学の研究史である。

ヘルダーの啓蒙主義時代に先立って世界音楽の概念が現れる著作として、数ある候補のなかから三つだけ短く取り上げたい。その最初のもは、およそ 3 世紀のインドの音楽・演劇・舞踊論書である『ナーティヤ・シャーストラ Natyashastra』である（Bharata-Muni 1961 参照）。[第二に] 音楽の普遍性への追求は中世イスラーム世界の著作に於ける歴史的ライトモチーフとなった。たとえばイブン・ハルドゥーン の 14 世紀の著作である、世界の『歴

史序説 *Muqqadimah*』は、さまざまな文化の音楽について豊富に言及している (Ibn Khaldūn 1967 参照)。「第三に」16～17 世紀の、ヨーロッパの「出会いの時代」[いわゆる大航海時代] もまたグローバルな音楽学的瞬間を潜在的に含む著作を生み出した。そのなかで最も知られているのは、アタナシウス・キルヒャーによる 1650 年の世界の音楽に関する汎論 *Musurgia universalis* [邦訳書タイトル『普遍音楽』] であろう (Kircher 1650、この音楽世界観については付録 1 の扉絵を参照されたい)。

ヘルダー以降の数世紀にわたり、グローバルな音楽学的瞬間は増殖をみせ、その上に今日の音楽学の諸分野が築かれている。ヘルダーの一世紀後、アレクザンダー・エリスとグイード・アードラーはさまざまな社会科学と自然科学とを近代の音楽学へと統合し、この分野を、音楽と人間の多様化を含むものへと拡張した。アードラーの 1885 年の論文「音楽学の範囲・方法・目的」はグローバル的かつ学問的に包括的であることで知られ、音楽史、音楽理論、民族音楽学が何を達成し得るかを厳密に明示した (Adler 1885 参照。アードラーの有名な表は付録 2 として掲載)。

ここ数年の研究において、私は民族音楽学にとって決定的であったひとつのグローバルな音楽学的瞬間に関心を持っている。すなわち、ベルリンのユダヤ人研究者たち、とくにロベルト・ラッハマン (1892～1939 年) の研究における、録音技術と比較音楽学 *Vergleichende Musikwissenschaft* の成立との関係についてである。ラッハマンは、すべての人間が一緒に生きる自然の世界に対して旋律がいかに忠実かを広範囲に語り、それゆえ民族音楽学はグローバルな音楽学的瞬間の研究にあたって、録音された音、つまり忠実に本来の音を計測することに注目しなければならないと説いた。彼はその瞬間を、最も影響力のあった本『東洋の音楽』の冒頭で次のように述べている。

非西洋音楽の厳密に科学的な研究はわずか数十年の歴史しかない。これは物理学の方法を用いて楽器の音律を計測することや (1885 年、アレグザンダー・エリスの研究による)、フォノグラフを用いて声楽と器楽を録音し、できる限りそのままにその本来の音を記録することから始まる (Lachmann 1929, 1 頁)。

自然における旋律の真実を求めるラッハマンの追求は、彼がナチスの台頭後にベルリンを

追われ終焉の地となった西アジアのエルサレムから遠く離れた東アジアの最東端で、彼の
一世代あとにあらわれた、もうひとつの民族音楽学に深い影響を与えた。この旋律の普遍
的真実を求めることこそ、小泉文夫が口火を切ったグローバルな音楽学的瞬間の核心とな
るものであった。

小泉文夫と日本におけるグローバルな音楽学的瞬間

ここ東京で、聴衆諸賢の前で小泉文夫について語ることは、光栄でもあり恐縮でもある。
しかし、グローバル音楽学についていえば、私がたどった、ヘルダーからラッハマンに至
る歌と旋律の研究史を通じた、私から小泉文夫へと続く道はじゅうぶん自然であろう。実
際、ドイツにおけるユダヤ民謡に関する私の最初の論集 (Bohlman 1986~87) はジェイム
ズ・シドンスが書いた、小泉文夫が初期ベルリン学派の比較音楽学におけるユダヤ人の音
楽思想に負っていることを洞察した論文 (Siddons 1986~87) に並ぶ。

小泉とラッハマンの音楽学的瞬間が合流するいくつもの理由が確かにあった。ラッハマ
ンは世界音楽についてすばらしく広い視野をもった民族音楽学者であった。彼はとりわけ
北アフリカとイギリス委任統治領パレスチナで活躍した民族誌学者であった。彼は歌につ
いてのヘルダーの思想を受け継ぎ、それを世界中のできるだけ多くの文化の音楽に対して、
科学的に適用しようとした。しかし日本は特に、旋律と歌に関する彼の研究にとって基礎
となった (Lachmann 1929、たとえば 36~44 頁を参照)。

小泉は、エーリヒ・M・フォン・ホルンボステルやクルト・ザックスといった初期ベル
リン学派の比較音楽学者の著作とともに、ラッハマンの著作をとりわけ熟知していた (特
に Koizumi 1960 を参照)。小泉は自分の理論を 1950 年代に展開した時、彼はラッハマンの
著作を引用して、その理論を日本伝統音楽と、ラッハマンの初期著作に載っている他の世
界音楽との両方に適用した。小泉がラッハマンに見出したものは、自身の概念と協和しあ
う、グローバル的なもの、普遍的なものの概念であった。二人の民族音楽学者はどち
らも、すべての文化が分け持つ、いいかえればあるレベルで普遍的な、旋律の局面があ
ると仮定した。そうした類似性は、同じ旋律があるということを意味しない。むしろ一定
の共通した構造的原理、4 度のような特定の音程、緊張と弛緩といった前進的な運動から

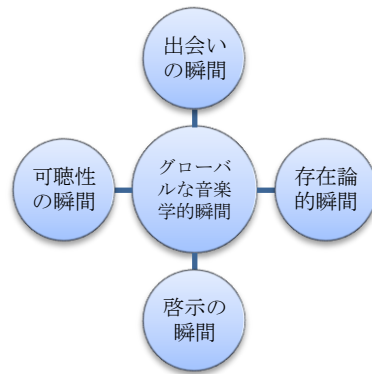
その類似性が生み出されるということである。世代と大陸とをまたがるこうした知的な交流こそ、きわめて注目すべきことである。さらに、この二つの音楽学的瞬間を結びつけ、それをグローバル音楽史へと変容させるものこそ、この交流なのである。

グローバルな音楽学的瞬間：ひとつのモデル

小泉文夫の人生と、日本の民族音楽学に対する彼の貢献をとおして、こうした歴史的瞬間が合流しているということに触発されて、私は本日この講演で提示するグローバルな音楽学的瞬間という考えを、もう少し理論的に具体化したいと思う。私が提案するこのモデルにおいて、グローバルな音楽学的瞬間は、四つの別の瞬間に囲まれた中心の位置を占める。その四つは時間的に次のような仕方で行んでいくものである。

- 1) 出会いの瞬間
- 2) 可聴性の瞬間
- 3) 存在論的瞬間
- 4) 啓示の瞬間

これらの瞬間のどれも静的ではなく、むしろ我々が音楽的経験を知覚し理解できる音楽的思考能力を拡張するほどに、それぞれが変容していくものである。この四つのプロセスによって可能になる運動は拡張の運動、すなわちグローバル化の動的なプロセスである。さらに、このモデルにおいて、ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー、ロベルト・ラッハマン、小泉文夫に共通の音楽学的瞬間をとらえる何ものかがあると私は考えたい。我々が音楽に見る普遍的な質とは、たとえば内に向けての暗黙のものでもあり、外に向かって明示的なものでもある。歌と旋律は、これらの瞬間を横断しており、グローバルに比較可能であり、同じようではあるかもしれないが、それはその歌や旋律の同一性でなく差異のためである。音楽史は本来ローカルからグローバルへと動くものである。



[概念図] グローバルな音楽学的瞬間 —— 「あらゆる歴史的瞬間」

グローバル化の彼方にあるグローバルな音楽学的瞬間

ヘルダー、ラッハマン、小泉がグローバルな音楽に、そして彼らの遺産に影響された日本および世界中の多くの音楽に取り組んだことによって提起された課題は、音楽がそれ自体以上のものになっている、そして音楽学が音楽をはるかに超えたところに至っていることを認めるものである。2010年代において、グローバル化の課題は、グローバル化を進める側からもその反対の側でも、明らかにこれまで以上に大きくなっており、我々は民族音楽学者としてその難題を痛切に感じている。私は光栄にもここに立ち、小泉文夫賞もまた、我々が分け持つグローバルな音楽学的瞬間の諸問題とともに音楽に関わるという課題を伴うものであることを認識する。国際音楽学会の機関誌 *Acta Musicologica* の共編者をフェデリコ・チェレスティーニとともに務める私の立場からみて、この機関誌はグローバル音楽学に挑む問題にますます関わるようになっていく。そのなかには日中間の記譜法の文化的流入と交流、移民や難民の強制移動といった論題があり、次号ではナショナリズムと人種差別がグローバル化をいかに蝕むかという問題が扱われる。

最後に、グローバル化という主題が日本の音楽学に歴史的な道を開くこと、とりわけ日本が2002年と2017年に主催した国際会議〔訳注：前者は日本音楽学会創立50周年記念静岡大会、後者は国際音楽学会東京大会〕においてグローバル化を受け入れたことを認めたい。これらの会議はグローバルな音楽学的瞬間として決定的に重要であり、ヘルダーが「あ

らゆる歴史的瞬間の歴史」の記述を求めたこと、小泉が旋律の普遍的な特質への潜在可能性を信じたことと響きあうものである。このようなグローバルな音楽的領域に関わることを通じてこそ、我々は音楽学者として、過去に記された音楽学的瞬間を探索した音楽学者や、また未来の人々のために生きられる世界を開く音楽学者とともに、そうした瞬間に入っていくのである。